

# 講演会

## 島の歴史学

### Historical Studies of Islands

人が暮らし、歴史が紡がれる陸域は、もとより島と大陸からなる。一般に島は「四面水に囲まれた小陸地」と定義され、所謂6大陸(アフリカ、ユーラシア、南・北アメリカ、オーストラリア、南極)を除く全ての陸域をその範疇に含むとされるが、オーストラリアと比較しグリーンランドが大陸とされないことに明確な理由があるわけではない。

もっとも、地理的区分としては曖昧かつ恣意的でも、島という概念自体は、歴史学の重要なツールとなるのではなかろうか。周囲を水域で画された島は、小島であるほど資源も乏しく、他の陸域に依存せずして人の住処となり得ない。それだけに、小島での調査・研究は、人の歴史がそれぞれに個別な事情を抱える他地域・他集団との関係性の中に紡がれることを意識させ、より広範な地域史ひいては世界史に目を向けさせてもくれる。あたかもカメラの被写界深度にも似て、対象地域を狭く絞り込むことで、周囲との関係性がより鮮明に浮かび上がる。小島にはそうした特性があるようにも思える。

そこで、本講演会では、ともするとローカル、マージナルと位置付けられかねない小島をフィールドにもつ三田史学会会員および会所縁の演者に、それぞれ調査・研究成果をご紹介いただく。個別・具体的な調査・研究事例に触れるなか、歴史学のツールとしての島の魅力を確認してみたい。

日 時: 2018年6月23日(土) 13:30~16:45

場 所: 慶應義塾大学三田キャンパス 西校舎517教室

入 場: 無料(どなたでも聴講できます!)

お問い合わせ: 佐藤孝雄 sato@flet.keio.ac.jp

次 第:

13:30 緒 言 「島の歴史学 —講演会の狙い—」

慶應義塾大学文学部 教授 佐藤 孝雄

14:00 講演1 「対馬の古文書 —対馬宗家が残した文書と記録—」

慶應義塾大学 名誉教授 田代 和生

14:30 講演2 「ジェルバ島の漂着聖女信仰 —ユダヤ教徒の祭礼を中心として—」

東京国際大学商学部 教授 田村 愛理

〈休憩〉

15:15 講演3 「島の修道院 —地中海カンヌ沖レランス島(Lérins)とその修道院—」

慶應義塾大学文学部 教授 神崎 忠昭

15:45 講演4 「『島景観』の歴史生態学 —ラパ・ヌイと石垣島のジオ・アーケオロジー—」

慶應義塾大学文学部 教授 山口 徹

16:15 コメント

慶應義塾大学 名誉教授 近森 正



## 対馬の古文書 —対馬宗家が残した文書と記録—

田代和生

長崎県対馬は、九州の北方、玄界灘の海上にある朝鮮半島に最も近い島である。この島の領主宗氏は、12世紀末、大宰府から派遣された在庁官人惟宗(これむね)氏が武士化し、対馬の領国支配と朝鮮との通交貿易を独占していく過程で「宗」姓を名乗るようになったといわれている。江戸時代になり、宗家は対馬藩主として「鎖国」時代の日朝外交・貿易を一任されたことから、島の歴史を物語る史料のほとんどが、宗家作成の文書と記録であったといっても過言ではない。

本報告では、対馬旧家の古文書伝領の実態と、現存点数12万余りの『宗家文書』の内容を明らかにするとともに、なぜこのように膨大な古文書が一離島において作成され続けたのか、その歴史的背景を探ってみたい。さらに報告では、文禄・慶長の役前後、宗家が作成した朝鮮国王の偽造国書について触れ、朝鮮半島への要衝の島において類例のない歴史を積み上げてきた対馬宗家の特異な役割を検討してみたい。

## ジェルバ島の漂着聖女信仰 —ユダヤ教徒の祭礼を中心として—

田村愛理

ジェルバ島は、チュニジア南部ガベス湾に浮かぶ島である。この島では、地中海性とアフリカ大陸性気候とが混在し、少雨のうえに地下水源が限られているために、島内各地域に多様な生態系が展開されてきた。島にはイスラームの正統派からその最初の分派(イバード派)、そして最古と称するユダヤ教徒ディアスポラまでの様々な宗教共同体があり、それらはさらにアラブ、アマジク(ベルベル)といった民族的要素によりモザイク状に断片化しつつ並存してきた。

しかし、島内の多様な住民の生活様態にはひとつの共通点がある。それは、メンゼルと呼ばれる屋敷地を中心に拡大家族単位で生活して来たことである。各メンゼルは互いに排他的で、フランス植民地時代にも町が発展するまでは、人々が接触する場は定期市と聖者廟への巡礼に限られていた。

本報告では、ユダヤ教徒共同体の祭礼(エルグリーバ)を中心に島の漂着聖者信仰に焦点を当てる。自給自足が困難なこの島で、異なる宗教・民族共同体に属する人々が聖者信仰を軸に、孤立しながらも相互依存してきた多元的構造を考える。

## 島の修道院 —地中海カンヌ沖レランス島(Lérins)とその修道院—

神崎忠昭

ヨーロッパの古い修道院には、フランスのモン・サン・ミッシェル修道院やギリシアのアトス山修道院共同体のように、島(あるいは島に準じたものとして半島)に建てられたものがいくつもある。だが、修道院も生存のためには多くの物資を必要とするのに、なぜそのような一見不便な地に建設されたのだろうか。

本報告は、フランス・カンヌ沖合2キロにあるレランス島とその修道院をとりあげ、古代から中世末期までについて、その簡単な歴史を示すとともに、修道院に関わる文献史料や遺物を通じて、この問題を考察し、「島」はさまざまな人が行き交う場であり、「本土」とは隔たっているものの孤立してはおらず、「本土」との関係性の上に成り立っていることを検討し、さらに人々の思いや営為が幾層にも上書きされて、その「イメージ」がどのように生成されていったかを考えることを目的とする。

## 「島景観」の歴史生態学 —ラパ・ヌイと石垣島のジオ・アーケオロジー—

山口 徹

太平洋に散らばる島々は、人類の移動や拡散ルートの中継地であり、移動にともなって運ばれるモノや言語、文化要素の発信元、あるいは運搬先としてこれまで語られてきた。文化史の解明を目的とする考古学である。しかし、島嶼環境の通時的変化にかかわる情報が蓄積されるにつれて、「人間由来の(anthropogenic)」景観や「人間が引き起こした(human-induced)」環境改変といった歴史生態学的研究に考古学の関心がシフトしてきている。個々の島に焦点をあてれば、海を渡る人々はさまざまなモノを運び込み、持ち込んだ道具とアイデアで土地をいじくり、往々にして土着の動植物相を消費しつつ、死滅させる存在と見なすことができる。本発表では、東ポリネシアのラパ・ヌイ(イースター島)と八重山諸島石垣島を事例に、自然の営力と人間の営為の絡み合いの歴史を島景観に読み解くジオ・アーケオロジー研究(地球科学×考古学)の方法と有効性について紹介する。